

MEDICAL ESSAY 4

# 雪が降らないなんて

徳 永 進

雪が降らなくなった、と思う。ぼくらが子供のころ、およそ35年か40年前、雪はよく降った。つららも長く軒先にぶら下がった。巨大なつららをこちんと折ると積もった雪の中に沈んだ。青空が広がり、名を知らぬ綺麗な鳥が飛んでいた。

道を歩く、そのことを実現するために近所の人とスコップを持って道に出た。大通りまでの道をつけるとハァーハァー白い息が雪の上に舞った。八百屋へ行って帰って、魚の数匹でも購入できると、台所係はヤレヤレと額の汗を拭く。白菜と大根のミソ汁が口に入るとき、窓の向こうに降る雪を見ると、雪に閉ざされている不便さと同時に、閉ざされるために味わえる熱いミソ汁のおいしさを知る。雪に閉ざされないと何か怪しい気がするの、閉ざされることで得る喜びの数々を失っているからだろう。

\* \* \* \* \*

今日は1月6日の木曜日。ぼくは外来にも検査にも入らなくていい気楽な日。こうして病棟のカンファレンスルームで楽書きをしている。看護婦さん同士が廊下で掛け合う声や、患者さんや家族が電話をかけたあとの「ピーピー」というテレホンカードを取って下さいという合図音、それに、「お茶で一す」という看護助手さんの声、それから詰所で鳴るナースコールの電話音の響き、廊下で心配声の付き添いさんたちの立ち話などが反響してる。

先ほど切れた処方箋を書きに6病棟に行くと、

---

とくなが すすむ：鳥取赤十字病院内科部長

糖尿病を放置して脱水症で入院した和尚さんが、飯を食わせて欲しい、と言っていた。昨日は朝からずっと吐いていた。しかも、糖尿病があって、きちんと食事療法を守らなければ次々に合併症を起こす、と説明していたのに、「葬式や法事や、盆や彼岸で忙しゅうて、それに檀家にすすめられると、つい断れずに飲んで」と言っただけで飲み続けるというセルフケア不能患者なのだ。なんと言っても聞かない。

「できたら、あさって退院したい、檀家総会があるので」とも言った。5年前の夏、心筋梗塞で入院したことがあった。この時も「盆までには帰らねば」と言って勝手に、入院9病日目にスタスタと歩いて退院していった。きっと今回も勝手に退院してゆくだろう。

糖尿病という病気は、ほんとはきちんとコントロールしておいた方がいい病気だ。でもこの和尚さんのように「我が道を行く」というのもまんざら悪くないかも知れないと思う。人に抑制されたり、管理されたりせずに生きる。そうすることで、内にある力が生き生きと動く。ポキッと折れるようにして人生が終わることはあるが、長くつまらなく生きるよりは楽しい、とも考えられる。

5病棟に処方箋を書きに階段を降りて行くと、深夜勤務の看護婦さんがくたびれた顔で記録を書いていた。「くたびれた?」「ええ」「亡くなったの?」「いいえ、亡くなりそうで、亡くならなかったんです」「それでくたびれた?」「ええ、そうなんです」

心電図モニターは心室頻拍か心室細動になっていた。主治医は同僚のF先生だった。病室に入ってみると、表情はやせこけていたが見覚えのある

〈ヨコハラキミ〉さんだった。毎日のように外来や夜間の救急室に亡者のような歩き方でやってきては「腹がしくしくする」と訴えた。「検査しましょう」と言うと、「怖いからしない」その繰り返しだった。

結局は大腸癌で、手術を承諾するのも数カ月かかった。術後しばらくして悪液質となったが入院拒否。やっと入院すると、すぐに下顎呼吸となったそうだ。

「おかあちゃん、えらかったなあー、おかあちゃん」

3人の娘たちが大声で泣き叫んでいた。他にもたくさんのお親類の人がいた。「自分で自分を悪うしただけ」とご主人は呟いた。天涯孤独な独り者のように思えた〈ヨコハラキミ〉さんがこんなに多くの暖かい家族員に囲まれていたのか、と不思議なものを見たような気がした。

早く検査をすれば、早く手術を、早く入院をすればよかったのに、とは思わない。〈ヨコハラキミ〉さんらしい選択だったと思う。人間はいろんな所で、その人に合った、(いや時々はその人に似合わない行動を選択してしまうこともあり、それが人生というものとも言える)その人らしい行為をする。それでいいのではないか。早期発見だけが正しいわけではない。

\* \* \* \* \*

その人らしい行為、と書いて、先週外来にやってきた二人の男性患者さんのことを思いだした。

「先生、わし、なんでこんなにえらいでしょう。便秘するし、下痢するし」

〈ヤマモトノゾム〉さんは70歳の男性。両下腿がなく、車椅子で外来にやってくる。夏には腸閉塞で入院した。高カロリー輸液のラインや胃チューブを挿入する時も諦めているようで、スムーズに処置は終わった。

「わし、南方で捕虜になりまして、さんざんい

じめられて、こんな体になりました。わしも悪いことしました。でも上官の命令です。上官には逆らえません」

困ったような顔をして〈ヤマモトノゾム〉さんは、〈このえらいの何とかして下さい。いっぱい人間殺したから、わしバチが当たったんでしょか〉と呟く。看護婦さんが「山本さん、そんなこと言うもんじゃないよ。待合室には他の患者さんもおられるんだから」とたしなめる。

別の日、赤い羽根を胸元につけた老紳士が新患外来にこられた。「ビルマ、今のミャンマーですわ。長やりでブスッ、ブスッと何人も殺しました。今でも夢でうなされます。ブスッって。ボランティアです。今は街頭に立って、赤い羽根や緑の羽根売ったり、何でもかんでもボランティアです。これせんことにゃ、罪滅ぼしできませんでなあ」

\* \* \* \* \*

のんべんだらりんの今の世の中。コンピューター社会、そして駐車場の街。広葉樹林の消失、ベルトコンベア教育、それに高度医療器あげくの果てはヒヒの肝を奪っての移植医療。

克服するというにも節度があるのではないかと思う。便利さ、快適さを求めること、お金を求めること、長い命を求めること、どれもほどほどにしないといけないのではないか。おいしいものを食べることも。

21世紀になったら、「不便」を梱包した商品が各家庭に置かれるようになるかも知れない。「家庭に一台、『不便』。これがないと家庭は崩壊」、そんなコマーシャルが流れるかも知れない。

ここまで書いてお昼のチャイムが鳴った。窓の外に青空。やっぱり雪は降りそうもない。

冬に雪が降らないなんて、わさびのない寿司、ふんどしのない相撲取りのようだ。